

T男さんは、自分の担当である職員が他の担当利用者の方と外出に出かけた後、突然走りだして、他の利用者の方を突き飛ばすということを繰り返す人でした。また、H男さんは、母親との面会の日程がなかなか決まらなないと、夜中でも居室や廊下の掃除を始めたものです。一方、K男さんは、他の利用者の面会や帰省がある週末には、朝からパニックを何回となく繰り返し、服を破いてしまったり、テレビを壊してしまったりということを繰り返していました。

ここでの三例は、ともに愛着の対象が、自分から離れて行ってしまふ不安（多くは母親や担当職員が離れて行ってしまふ不安ということになります）－「分離不安」の高まりから生じた行動と考えられるのですが、同じ「分離不安」が高まったとしても、生じる行動がさまざまあることが、本人中心の個別支援の大切さを教えています。それは、人には、（たとえ障害者であったとしても）それぞれの人生、それぞれの成育歴があり、その人が歩いて来た足跡をたどり、寄り添うことが質の高い支援を提供するのには不可欠であるという支援スタンスです。

それでは、さらに「分離不安」の高まりから生じる行動を拾って行ってみましょう。

M子さんは、父親に大嫌いな味噌汁を無理して食べなくても良いという承認をもらった日に、十年以上続いていた夜尿がピタッと止まりました。K子さんの「あっち、あっち」というお別れ場面での母親への後追い行動は、自分らしい、おしゃれな服を母親の反対を押し切って買うことを繰り返しているうちに消滅していききました。Y子さんは、その昔、父親や母親とのお別れ場面で、玄関から遠く離れた建物の反対側から、「早く帰れって、言っているじゃないか！」と大声で叫んでいたものです。

「分離不安」というのは、自閉症だから生じるという行動ではありません。どんな方にも少なからず生じている心理状

態です。もちろん幼い子どもには生じやすいですが、だからといって大人になれば生じないかというと、そんなことはありません。

一歳半位のお子さんが、母親と離れられなくて、母親のお便所までついて来るなんていう行動は、明らかに分離不安が背景にあります。これは当たり前の心理状態で決して病気でも何でもありません。特別な手立てを講じなくても、安定した母子関係の中で自然に消滅していきます。お便所について来なくてはならない心情を理解し、母親の見えなくなってしまう不安に共感し、過度に叱ったり、大泣きしているのに、便所の外で一人で待たせるといような訓練をしなければ、心の傷になるようなことはありません。

また、分離不安の時期を乗り越えて順調に過ごしてきた子ども（長男&長女）が、第2子の出産によってく赤ちゃん返り>をするなんていう姿は、良く知られている「分離不安」が高まった状況ですが、これも大きな心配をしなくても、ちょっとばかり特別な配慮をするだけで立ち直っていくものです。第2子に対する母親の係りに対する羨ましさを言語化し、長男&長女のプライドを尊重しながら、今までと変わらぬく大好き>を伝える言葉と係りを続けていけば次第に消滅していきます。

しかし、「分離不安」が高まった時に生じる行動が、T男さんやY子さんのように身体的あるいは言語的な攻撃行動であったり、K男さんのように器物に対する破壊行動であったり、M子さんのような身体症状やK子のような退行現象、H男さんのような過剰適応行動の出現となると、その行動変容には、特別な手立てが必要となります。「分離不安」が一過性の現象ではなく、すでに「分離不安障害」といようなレベルに達しているからです。

さて、次回、連載33では、そのく特別な手立て>についてお話します。